

ガラテヤ書1章15-16節 「恵みによる選び分け」

1A 最も小さき者

1B 教会の迫害

2B ユダヤ教に進んだ者

2A 母の胎からの選び分け

1B 善悪の行いの前

2B 異邦人の中の福音

1C キリキアのタルソ生まれ

2C 律法の教育

3C ローマ市民

3B 御子の啓示

3A すべては次の備えのため

本文

ガラテヤ人への手紙1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回、ガラテヤ1章の前半部分を見てきました。午後礼拝で、後半部分11節から24節までを一節ずつ見ていきます。今朝は、15-16節に注目します。「¹⁵しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、¹⁶異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、私は血肉に相談することをせず、」

私たちは前回、私たちがキリストの恵みによって召されたことについて学びました。その恵みの召しをよく表しているのは、パウロ自身です。彼は、テモテへの第一の手紙で、「1:16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」自分自身が、神の憐れみと恵みの先例となったのだ、ということです。パウロのようなものが救われるのであれば、他の人々も、神の恵みによって救われるのだという先例になる、ということです。

1A 最も小さき者

1B 教会の迫害

パウロは、自分のことを、「使徒の中で最も小さい者（Iコリ15:9）」と呼びました。パウロというのはラテン語の名前ですが、「小さい」という意味です。なぜ最も小さいか、と言いますと、神の教会を迫害したからだ、と言っています。彼がどれほどの者であったかは、想像がつくでしょう。ダマスコにいた、キリストの弟子アナニアに、主が語られたのです。サウル、パウロのヘブル語の名前ですが、サウルが祈っているから、彼に手を置きなさい。彼が、目が見えなくなっているが、手を置け

ば、再び見えるようになる、ということをアナニアに伝えました。アナニアは言ったのです。「9:13-14 主よ。私は多くの人たちから、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。14 彼はここでも、あなたの名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから与えられています。」彼は、主が命じられることに初め、いやです、と声を挙げたのです。キリスト者たちが、彼を消し去ってくださいと願い、祈っていたかもしれない人を、神は敢えて選ばれているのです。

イエス様が言われましたね、「マタ 11:11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。」天の御国において、私たちは驚くべき姿を見ます。最も小さい者でさえ、人の中で最も偉大なバプテスマのヨハネよりも偉大なのですから。悪で知られていた人が、そこにいます。お互いに悪で知られていた人が、「あれっ？お前、なんでここにいるの？」と言ったら、「お前こそ、何でここにいるんだ？」という会話をしています。天の御国とは、イエス様が語られているのは、必ずしも死んでからの世界ではありません。主がおられて、神が支配されているところですから、教会の中でもそういうことを体験するのではないのでしょうか？自分が相当ひどい過去を持っていると思っていたら、知り合いになって話し合ってみたら、相手もかなりやばいところを通っていたなんて、あります。それは、どれだけイエス様が寛容な方であることを示すのです。教会を迫害する者、キリストの弟子たちに暴力をふるい、死にまでも至らせる偏狭な狂信者、サウロを、キリストの愛を宣べ伝える使徒とされたのです。

2B ユダヤ教に進んだ者

そして、パウロは自分のことを、「1:14 また私は、自分の同胞で同じ世代の多くの人に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心でした。」と言っています。

ユダヤ教に人一倍熱心である人が、異邦人へ福音を宣べ伝える人に変えられている、ということも、驚きです。パウロは、ガラテヤ書で「3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」と言いました。これは、当時のパリサイ派のラビが毎朝祈っていたことの真逆です。こう祈っていました。「父よ、私が、異邦人として、奴隷として、女として生まれなかったことを感謝しています。」

ユダヤ教において厳格なパリサイ派は、主の律法に従い、それで神の国で偉大な者になれると思っていた。まず、異邦人は地獄に投げ込まれて、その燃える火の燃料のようなものでした。彼らは外を歩く時に、着ている物をぎゅっと縛りましたが、それは衣が異邦人に触れて、汚されるのではないかと恐れたためです。触れてしまったら、体の水洗いをし、衣を洗い、その人は宮の中に入りません。ここまでの徹底ぶりです。そして、ローマでは奴隷制度がありました。その奴隷になっていないことを感謝しています。女については、異教と比べればその尊厳は守られて

いましたが、下に見られていました。そうした考えの持ち主が、キリストの恵みによって変えられて、キリストにあって一つなのだということを知ったのです。つまり、すべての人が、全く同じように、キリストにあって神に近づくことができるようになっている、ということです。ここに差別は全くありません。人の死は、どんな身分の人でも全く差別なくやって来ますが、同じように、信仰によって義とされて、いのちを得るのも、全く差別なく与えられます。

なぜ、パウロは、この福音を知ることができるようになったのでしょうか？それは、とりもなおさず、彼自身がどれほどの罪人なのか？を悟ったからです。彼はテモテに、自分を「罪人のかしら」といっています。そして、このような者を救われたキリストは、あまりにもすばらしい方なので、自分がいかにユダヤ教にすぐれているのかは、塵あくたのようにみなしてかたからです（ピリピ 3:8 参照）。自分が、神の恵みによって救われた罪人であることを悟った時に、周りの人々がすべて、神のかたちに造られている尊い存在であることに気づきます。イエス様が、最も小さき者にしたことは、わたしにしたことだと言われましたが、最も小さき者が、イエス様のように尊いものに見えるのです。

2A 母の胎からの選び分け

そしてパウロは、「¹⁵しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神」と言っています。

1B 善悪の行いの前

驚くべきことに、神は母の胎にある時から、選び出される方です。覚えていますか、神が、リベカに二人の男の子を胎に宿らせました。ヤコブとエサウです。その時、兄が弟に仕えると主が言われたのですが、それは彼らがまだ彼女のお腹の中にいた時なのです。ロマ 9 章に、こう書いてあります。「9:11-12 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、12 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。」生まれてから、どのような行いを行ったかで、神はヤコブを選んでいませんでした。ただ愛されていたのですが、それは母の胎にいる時から愛し、選んでおられたのです。ヤコブの生涯を見ると、どう見ても、人から愛されるという感じがでないですね？ずるがしこい、抜け目ない人のように見えます。けれども、なぜか彼は祝福されています。

ここに、神の不思議があるのです。神の愛の不思議、恵みの不思議と言ったらよいでしょうか。神は、私たちがこうでしょ？と思われるのと逆のことを行われます。兄ではなく弟が選ばれるなど、人の願いや思い、行いとは異なることを、敢えて行われています。それは、神こそが主権を持っておられて、人の行いとは別なのだということを教えておられるからです。人が誇ることはないようにするため、神のみが栄光を受けるためです。主は言われました。「イザヤ 55:8 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。」ここでは、主が豊かな憐れみを注いで、罪を赦されることについて話されている時に語られた言葉です。憐れみの豊

かさにおいて、神の道と、私たちの道は異なるのです。

2B 異邦人の中の福音

こうしてパウロが、恵みによって召されているのですが、それは、「**異邦人の中に御子の福音を伝えるため**」であると言っています。異邦人が地獄に行くしかないと思っていたパウロを、主は御子の福音によって救われるために召されています。強硬な反対者は、時に積極的な支持者になることがあります。神は、恵みによって、私たちとは異なる見方をしています。

1C キリキアのタルソ生まれ

パウロは、「**母の胎にあるときから**」と言っていますが、パウロが、キリキアのタルソ生まれであることが、神の備えであると言えます。そこは、ギリシア文化や学問が発達した、ローマの町でした。パウロが、エルサレムでユダヤ人たちの騒動があった時に、千人隊長にギリシア語で話しかけたのを思い出してください。「すると千人隊長は、『おまえはギリシア語を知っているのか。』」と尋ねています。パウロは、「私はキリキアのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした街の市民です。」と答えています(使徒 21:37,39)。それで、千人隊長は彼を、ある程度、信用したのです。彼が暴徒のような者、無学で粗暴な者ではないと判断したのです。キリキアのタルソということで、信用を得るほど、タルソはギリシア文化や学問で有名だったことがうかがえます。

これが、母の胎にあるときからの、神の選び分けなのです。パウロは、ローマ世界の共通言語になっていたギリシア語をもって福音を宣べ伝えました。そして、言語が分かっているだけでなく、ギリシア人の考え方や思想、文学などにも精通していました。ユダヤ人であってパリサイ派でありながら、彼は自分の周りに住んでいたギリシア系の人々のことは、よく理解していました。ギリシアの世界に福音を宣べ伝える器として、母の胎にいる時から選び分けられていたのです。

私たちにとって負の歴史と思われることも、神の国の福音にとっては有利に働くことは、多々あります。私が東アジア青年キリスト者大会で運営委員を務めていて、長いこと知っている、若い宣教師の子たちがいます。韓国人の宣教師の息子、娘ですが、小さい時にいじめられてきたことで、日本に対しては負の感情があります。だからといって、韓国に行ったら自分たちが合っているか？といたら、全然異なって、完全に考え方は日本人です。アイデンティティーについての悩みを持っていましたが、大会に出て、神の国の働きのための備えであることを知りました。日本語は日本人と全く変わりなく、また韓国語も流暢です。そして英語も習得しましたから、宣教の働きにおいては、韓国も世界宣教に熱心ですから、全世界をかなり網羅できるのではないのでしょうか？

例えば、私はじくじく考えたことはありませんが、声が大きいです。中学生の時は、ひそひそ話ができないとして、からかわれたことがありました。「ねえ、ねえ」と耳元でささやいているつもりが、皆に聞こえてしまっているという。ところが、まさかマイクなしでも、声が遠くまで通っているという、

説教のためには抜群の発声です。これを、母の胎にある時から神が備えていたと言わずして、何なのでしょうか！（笑）神のユーモアです。

2C 律法の教育

それだけでなく、パウロは、ユダヤ人として、その世界の先を進んでいました。彼は、エルサレムのユダヤ人の群衆に対して、ヘブル語で話しかけ、静かにさせました。自分たちの仲間であることを、すぐに知ってもらえました。そして、こう弁明しています。「使 22:3 私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」そうです、ギリシアの文化と学問が発達した町出身なのですが、実は、エルサレムのディープなユダヤ教教育を受けていたのです。おそらく、12歳になって成人と認められてから、ガマリエルの下での律法の厳しい教育を受けたのではないかと思います。ガマリエルと言えば、ユダヤ人の最高法院、サンヘドリンで、他の議員を制して、エルサレムにおける、この道と呼ばれていた、キリストの弟子たちの教えに、反対するのは良くないとした人です。それだけの影響力を持っている人です。当時の、最もすぐれたユダヤ教教育を受けた人ではないでしょうか。

だからこそ、パウロは、知識において、他の使徒たちに劣るものではありませんでした。パウロは、何度となく福音の弁明をする時にこう言いました。自らユダヤ教徒である、ヘロデ・アグリッパ二世に対してこう言ったのです。「使 26:5-7 彼らは以前から私を知っているのに、証言しようと思えばできますが、私は、私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してきました。6 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。」律法に精通していたからこそ、先祖たちの望んでいたもの、その神の約束が、イエスのよみがえりによってかなえられたのだと宣べ伝えることができたのです。これらは、エルサレムに律法の教育を受けさせることにした両親の中で生まれたからに他なりません。

3C ローマ市民

そして、彼はローマ市民でもあります。しかも、生まれながらの市民です。パウロが、エルサレムで群衆に宣べ伝えた時に、彼らがわめき、叫びました。それで百人隊長が取り調べのために、むち打ちをしようとした。パウロは言いました、「使徒 22:25 ローマ市民であるものを、裁判にもかけずに、むちで打ってよいのですか。」千人隊長のところに来て来られて、彼は、「私は多額の金でこの市民権を手に入れたのだ。」と言ったら、パウロは言いました。「私は生まれながらの市民です。(22:28)」私たちは、自分が国民であり、住んでいるところの市民であることは、当たり前だと思います。これは、長年かけて権利が与えられてきたからであって、世界中の国々そのような権利があるわけではありません。私たちが宣教地に行っていた時に、その国の首都の市民に

なるのは、特別な人たちしかなれないのです。

ですから、生まれながらの市民というのは、本当に特別なのです。パウロはそれを持っていたので、今のような危機の時にその権利を行使して、福音宣教の働きを続けることができました。ピリピにおいても、むち打ちを受けた後で、ローマ市民であるのに裁判を受けることはなかったとして抗議して、謝罪させた場面があります。おそらくは、ピリピの残された信者たちに迫害の手が来ないように、法的な権利を行使したのだと思われます。

みなさんが日本国民であるということ、そして旅券を持っているのであれば、それは最強の旅券であると言えます。ビザなしで渡航できる国は 192 カ国、四年連続で世界一なのです。まさに、パウロのような、母の胎から選り分けられたという神の恵みは、日本国籍を持ちながらキリスト者になったみなさんにも与えられているのです！このすごさをいつも語るのですが、その恵みに気づく人は本当に少ないですね。当たり前になっているからですね、けれども、それこそが霊的に大きな障害になるということを、以前、お話ししたことがあると思います。世界の全ての人に、そのような移動の自由が与えられているわけではないのです。しかし、日本には与えられています。

3B 御子の啓示

そして、「御子を私のうちに啓示することを良しとされた」とパウロは言っていますね。パウロが、ユダヤ教に進んでいたことに関わるのですが、御子を啓示されたということは、彼が福音宣教者にふさわしい者とさせたのです。イエス様が、何と言われたでしょうか？「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」御子は、預言者や律法を成就された方なのです。

パウロは、律法について二つのことを悟りました。一つは、今、話しましたように、律法の目標はキリストだということです。「ロマ 10:4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。」律法を守り行って、それで神に義と認めてもらおうということではなく、律法というのは、キリストを証しして、この方を信じるようにすることが目標なのだということです。それを守り行えず、違反して死に値するということも、キリストの死が証しされています。パウロは、キリストによって、これまで知っていた律法に光が当てられました。律法の意味が一気に、違う色に変わったのです。それで、神の国が一気に彼の目の前に広がったことでしょう。

そして律法のもう一つの特徴は、「霊的だ」ということです。「ロマ 7:14 私たちは律法が霊的なものであることを知っています。」律法に書かれていることは、その内にある態度までに関わって来るものです。殺してはならない、という戒めも、兄弟を憎んでいたらすでに殺人の罪を犯していることとなります。パウロは、律法については非の打ちどころがないことを話していますが、これがキリストの教えに照らして、霊的であることを悟って、自分がとてつもない罪人であることが分かったの

です。もし、彼のように律法をとことんまで守り行おうとしていなかったら、中途半端だったら、律法の行いによる義にまだ期待していたかもしれません。とことんまで突き詰めたので、それがいかに罪を示すものであっても、人を義とするものではないことを知ったのです。

このようにして、御子の啓示によって、彼は、一気に光が与えられ、キリストを迫害する者から、キリストを宣べ伝える者になったのです。神の恵みがこのようにするのです。

3A すべては次の備えのため

このようにして、母の胎にいる時から、神が恵みをもってえり分けるのです。チャック・スミスは、晩年、息子に対してこう言いました。「神はその器を整えられる。すべての事が、他の何かのための準備なのだ。(God prepares His vessel. Everything is preparation for something else.)」今の自分には分からなくとも、神は確実に、私たちをご自分の作品として準備しておられるということです。そして、そこには恵みの足跡があります。自分にはふさわしくない、神のとてつもない恵みが、映し出されています。信じましょう、この神を信じて生きていきましょう。